

霞

— 2008年度夏季展示室だより — 土浦市立博物館 平成20年7月1日発行（通巻第4号）

土浦市立博物館では春（4～6月）・夏（7～9月）・秋（10～12月）・冬（1～3月）と季節ごとに実物資料の展示替えを行っております。本誌「霞（かすみ）」は、折々の展示資料の見どころをご紹介、解説するものです。また、展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦（4）…1
- 博物館からのお知らせ……………1
- 【2008年度夏季の展示資料解説】
- 灰釉陶器……………2
- 「関東幕注文」国宝上杉家文書（複製品）
（中世）……………3
- 闘評詩巻（近世）……………4
- 「青い目の人形」（近代）……………5
- エビダル漁と水辺のくらし（近代）…6
- 市史編さんだより……………7
- 「霞」短信 亀城公園東櫓について…8
- コラム（4）墨の色……………8

古写真・絵葉書にみる土浦（4）

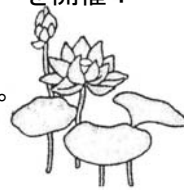
絵葉書「土浦駅前 昭和十三年六月三十日 茨城県土浦町大水害ノ実況」



正面は昭和 11（1936）年完成の土浦駅。駅前通りは川のようになり、人々は駅前に船で避難しています。霞ヶ浦の逆水と桜川の増水などにより、土浦は度々水害にみまわれ、昭和 13 年と 16 年の洪水は特に被害が大きいものでした。その様子は多くの古写真や絵葉書に記録されています。【情報ライブラリー検索キーワード「洪水」「水害」】

博物館からのお知らせ

- テーマ展「はすと日本人、れんこんと土浦」 会期 7月23日（水）～9月7日（日）まで
 - テーマ展展示案内会 8/3（土）と16（日）午後2時～
- 夏休みファミリーミュージアム ※体験講座の申込方法などはチラシ・ポスターでご確認ください
 - 「はすから糸をとってみよう」 8/9・23（土） 11:00～12:00 定員親子10組
 - 「かすみ人形をつくろう」 7/27（日） 13:00～16:30 定員親子5組
 - 「親子はたおり教室」 8/22（金）・23（土） 10:30～12:00、13:30～15:00 定員親子16組
 - 「親子史跡めぐりー遊覧船にのって霞ヶ浦の自然と歴史をまなぼうー」
8/27（水）9:00～16:30、定員40名、参加費1,000円（乗船代）
 - そのほか7/23～9/7までの期間中は、クイズラリーを開催！
- はたおり体験 9月中の毎週土曜日に実施
※はたおり体験は要予約、詳細はお問い合わせください。
- 「歴史講座「墨僊塾」前期」（5回連続講座）
8/30・9/13（土）ほか13:30～15:00 定員50名



館長講座にご参加ください！
「常陸国風土記の世界」
（連続3回講座、毎月第3日曜日）
7/20・8/17・9/21
時間 午後2時～3時30分
講師 茂木雅博 館長

灰釉陶器

—海をわたってきた「やきもの」—

ご紹介する灰釉陶器は、奈良時代から平安時代初めころ（8～9世紀）に焼かれた、淡い緑色をした「やきもの」です。古代の日本でながく使われていたのは、素焼きの須恵器や土師器など実用本位の地味な「やきもの」でした。一方中国では、唐三彩や青磁、白磁など釉薬をかけた色あざやかな陶磁器が作られており、日本でも奈良・平安時代になると、唐三彩の技法を導入し奈良三彩を、青磁をまねて緑釉陶器を作りだします。そしてこのころ、淡い緑色をした灰釉陶器も作られました。

灰釉陶器は植物の灰を釉薬とした「やきもの」で、白く焼きあがる良質の粘土を使います。古代の文献（安祥寺資材帳・867年など）にみられる「白瓷」は灰釉陶器を指すといわれており、白い地肌に釉薬が淡い緑色に発色し、美しさを増しています。生産地は今の岐阜県、愛知県、静岡県にかけてで、とくに愛知県北東部（名古屋市、豊田市、瀬戸市）の猿投山と呼ばれる一帯は、わが国最大の生産地でした。生産の中心は食器である碗・皿類で、そのほか貯蔵用の瓶や壺類も焼かれました。9世紀前半に猿投窯で本格化した灰釉陶器の生産は、9世紀後半には美濃（岐阜県多治見市・土岐市）や三河（愛知県豊橋市）へも広がりました。

平成3（1991）年に、霞ヶ浦の土浦入り北岸の台地上、土浦市おおつ野（旧田村町）にある石橋北遺跡から200点を超える多量の灰釉陶器が出土しました。当時茨城県内の遺跡でもこれほどの出土例はなく、平安時代の掘立柱建物跡が多数発見された石橋北遺跡は、古代の「流海」に臨む大規模な物資の集積地ではないかと考えられました。また同年、石橋北遺跡に近い八幡脇遺跡の火葬墓から、骨蔵器として使われたみごとな灰釉陶器の短頸壺も出土し、注目されました。

最近では、県内でも灰釉陶器の出土例が急激に増えており、多くの遺跡から発見されるようになりました。土浦市内で先の石橋北遺跡に次いで多くの灰釉陶器が出土した上高津の寄居・うぐいす平遺跡は、竪穴式住居だけで構成される奈良・平安時代の集落跡です。灰釉陶器は、このような一般の集落でも多く使われていたことがわかってきました。寄居・うぐいす平遺跡では、灰釉陶器の主流である碗・皿の食器は少なく、瓶や壺が多く出土しています。この傾向は、近隣のほかの遺跡でも認められ、当時日常の食器は新治窯など地元産の須恵器が使われていた様子がうかがわれます。

県内で発見される灰釉陶器の多くは猿投産の製品で、太平洋の外海をわたる水上交通により遠く常陸国まで運ばれたと考えられます。とくに、潮来・鹿島から土浦へ至る霞ヶ浦南西岸地域の集落からは多くの灰釉陶器が出土しており、内海だった古霞ヶ浦の水運が大きな役割を果たしていたようです。灰釉陶器は、水運を主とする当時の物資流通網にのって、とくに港湾や市など、当時の交通の要衝を基点にして多く普及していたものと考えられます。参考文献に上高津貝塚ふるさと歴史の広場第9回特別展図録『青と白の憧憬』があります。ぜひご参照ください。（塩谷 修）



市内遺跡出土の灰釉陶器

（左記図録）

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を8/23（土）午後2時から開催いたします。



「関東幕注文」 国宝 上杉家文書(複製品)

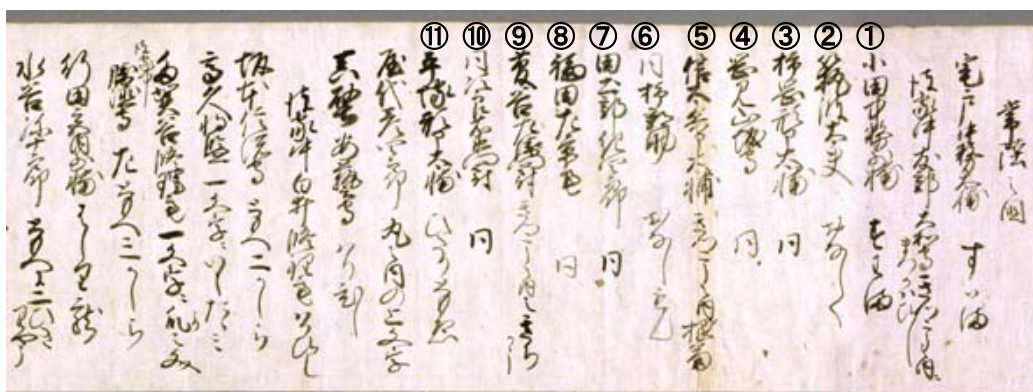
— 上杉謙信に味方した常陸の諸将 —

上杉家文書は、2018通、4帖、26冊からなり、平成13年に武家文書では初めて国宝に指定されています。「関東幕注文」は、その上杉家文書の中の一つで、長尾景虎（上杉謙信）に味方した関東の諸将の氏名が記されています。

長尾景虎（1530～1578）は、越後国（新潟県）を領し、加賀・能登に勢力を揚げ、北条氏康や武田信玄と戦った戦国時代の武将です。景虎は、永禄3（1560）年9月に後北条氏に追われて越後に下っていた関東官領上杉憲政を擁して関東に出兵しています。翌年2月には小田原城を包囲して、鶴岡八幡宮（神奈川県鎌倉市）において関東官領職を憲政から譲り受け、上杉政虎（後に輝虎と改め、剃髪して不識庵謙信と号す）と改名しています。「関東幕注文」には、この時に景虎に味方した関東諸将の氏名と家紋が記されており、小・中規模の武将が群雄割拠している中で、敵味方を区別する目的でまとめられたものと思われます。

「関東幕注文」常陸之国の部には、22名の諸将が記されています。中でも土浦地方を領していた①小田中務小輔（小田家15代氏治）を筆頭に平塚刑部太輔までの11名が小田勢として記されています。小田勢をそれぞれ紹介すると、家紋が同じことから小田氏と同族で筑波（つくば市）近辺の国人と思われる②筑波太夫、同じく同族で③柿岡（石岡市）の国人と思われる柿岡刑部太輔や、小田氏の家臣では牛久城（牛久市）主の④岡見山城守、木田余城（土浦市）主の⑤信太兵部太輔（伊勢守）、信太氏の庶家で氏治の側近と思われる⑥信太掃部助（治房）、信太氏の同族で田土部城（土浦市）主の⑦田土部紀四郎、同じく信太氏の同族で氏治の側近と思われる⑧福田左京亮（俊幹）、小田家宿老中の筆頭的存在で土浦城主の⑨菅谷左衛門尉（政貞）、戸崎城（かすみがうら市）主の⑩菅谷次良右衛門尉（次郎左衛門尉の間違いか）、海老ヶ島城（筑西市）主の⑪平塚刑部太輔が順に連署されています。

常陸国南部を広く支配下に置いていた小田氏は、永禄3年の時、一族一門を率いて長尾景虎に従軍し、佐竹氏らと共に北条氏に味方した結城氏を攻撃しています。しかし、小田氏は同5（1562）年に北条氏と同盟関係を結びます。そのため、永禄7（1564）年1月29日、3度目の関東出兵に出陣した上杉輝虎は、佐竹義昭・宇都宮広綱と共に小田氏の居城である小田城（つくば市）を攻略し氏治を敗走させています。これ以降、小田氏は幾度となく小田城の攻防を繰り返し、徐々に常陸国南部における支配力が低下していきます。小田氏にとって永禄5年の北条氏との同盟が没落への大きな転機となってしまったようです。（中澤達也）



国宝 上杉家文書「関東幕注文」常陸之國 部分（複製品、原資料は上杉博物館所蔵）

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を7/26（土）午後2時から開催いたします。



とうひょう し かん
闘評詩巻
いく ぶん かん

— 郁文館の勉強法 —

一見すると細かい漢字ばかりで、読んでみたい気にはなりにくい古文書です。でも、これが江戸時代のテストの答案だとしたらいかがでしょうか？ 少し興味が湧いてきます。テストの答案と言いつつ語弊があるので、丁寧にご説明しましょう。

土浦藩の藩校郁文館は天保10(1839)年、10代藩主土屋寅直の時に文館と武館が新築されました。武館では武術を、文館では四書五経などを学ぶ儒学や漢学を教えました。文館の授業は講義、会読(数人でテキストを読み合う)、輪講(順番に講義する)などの手段がとられましたが、その中に今回ご紹介する「闘評」「闘藻」という方法がありました。これは作詩(漢詩)や作文(漢文)の実践で、先生の評価を仰ぐ試験でもありました。

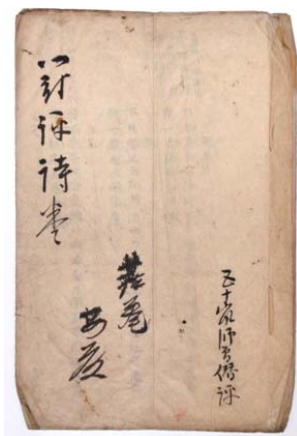
漢詩の場合はまず、先生が「梅雨」「湖上立秋」のような題を出します。生徒たちはそれぞれ作詩しますが、出来上がった詩を一人ずつ提出するわけではありません。生徒たちは漢詩を持ち寄って一冊の清書本を作ります。その際、生徒の名前は記入せず、清書も一人が行います。

先生は清書本を見て、一番良い作品に「甲」を、特に際立った表現には合点を付けます。先生にはそれが誰の作品かはわからないので、表現の優劣のみに集中して評価します。

評価が済むと、清書本は生徒たちに返され、最も高い評価を得た者が、清書本を手に入れることができました。これはとても名誉なことであると考えられていたようです。

この本は弘化3(1846)年に作られたもので、表紙には「闘評詩巻」という表題と共に「五十嵐師曾僭評」「落巻安藤」と書かれています。先生であった「五十嵐師曾」(1819~1874)は通称を儀一、号を愛山といい、郁文館から昌平黌に進学し、土浦に戻って郁文館教授となった人物です。清書本を手に入れた「安藤」とは安藤権兵衛(1825~1879)で、若い頃からずば抜けた文才があったといわれています。後に登斎と号し、郁文館都講(教授に次ぐ)に任じられました。

五十嵐が出した題は「観馬市(馬市を観る)」でした。馬市とは毎年3月初旬に中城町(現中央1丁目)の天満宮境内で開かれた馬を売買する市で、近郷からの人出も多く取引頭数は数百頭を数えました。「亀城繁盛勝王都(亀城の繁盛、王都に勝る)」という句が見えます。賑わう城下の様子は郁文館の生徒たちの眼にも誇らしく映っていたようです。
(木塚久仁子)



闘評詩巻 表紙



「観馬市」の部分

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を8/2・9/27(土)午後2時から開催いたします。



「青い目の人形」

— 戦争と平和の証言者 —

明治 18 (1885) 年に茨城県内で最初に開園した土浦幼稚園には、1 体の「青い目の人形」が残されています。日米親善のため、アメリカから日本に贈られた友情人形のひとつです。

今から 90 年余り前、アメリカでは日本人移民労働者への反感や人種差別から、日本人移民排斥運動はいせきが起こっていました。この事態を憂慮した親日家の宣教師シドニー・ギューリック博士が設立したのが「国際児童親善会」です。日本の子どもたちに「友情の人形」を贈り、「日米の平和の架け橋」とすることを計画したのでした。

昭和 2 (1927) 年 1 月、1 万 2 千体余りもの友情の青い目の人形が、横浜港に到着しました。3 月 3 日のひな祭りには歓迎式典が盛大に催され、その後全国の小学校や幼稚園で再び大歓迎を受けたようです。

茨城県には 243 体の人形が配布されたと記録されています。土浦尋常高等小学校（現土浦小学校）の沿革誌には、「昭和二年四月一日アメリカ人形ヲ寄贈セラル」とあります。子どもたちに加え、町長をはじめとした町の有志も臨席し、人形歓迎会は盛大に催されました。後に附属幼稚園（現土浦幼稚園）で保管されたのが、この「青い目の人形」でした。

しかし、昭和 16 (1941) 年に日米間で太平洋戦争が始まると、アメリカのものを敵視する風潮が徐々に強まり、各地で人形たちは廃棄されたり破壊されたりすることがありました。幸い土浦幼稚園では、人形は教職員の手によって保管され、戦後は職員室の片隅に置かれていました。髪の毛もアメリカから着てきた服も失われ、粗末なワンピース姿であったため、幼稚園百周年事業の際に服を新調し、現在は昭和 63 (1988) 年に再度新調した服を着ています。人形が携えていたはずのパスポートがなく、残念ながら名前は不明です。しかし、色あせひびわれてはいるものの、人形本体・靴・下着は当時のままの姿を留めています。

「青い目の人形」が到着した年の 11 月、日本からアメリカへも親善大使として、返礼の人形が渡っていました。洪沢栄一が会長を務める「日本国際児童親善会」と文部省を中心に、「答礼の日本人形」が贈られたのです。全国の児童から 1 銭の寄付金を募り、各都道府県、植民地、6 大都市、日本代表の計 58 体の特製の市松人形がアメリカへ旅立ちました。茨城県代表は「筑波かすみ」でした。こちらも幸いウィスコンシン州ミルウォーキー公立博物館で大切に保存され平成 18～19 年にかけて修復のため日本に里帰りし、県内に残る青い目の人形（10 体が現存。展示は最大 9 体）とともに県内各地を巡回し、戦争と平和について考える機会を与えてくれました。

80 年もの長い時をこえて、平和と友情の大切さについて語りかけてくれる「青い目の人形」。特別な役割を持った人形を、これからも守っていききたいと思います。

（宮本礼子）



「青い目の人形」
土浦市立土浦幼稚園所蔵

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を 9 / 6 (土) 午後 2 時から開催いたします。



エビダル漁と水辺のくらし

— マチのなかに残された漁具 —

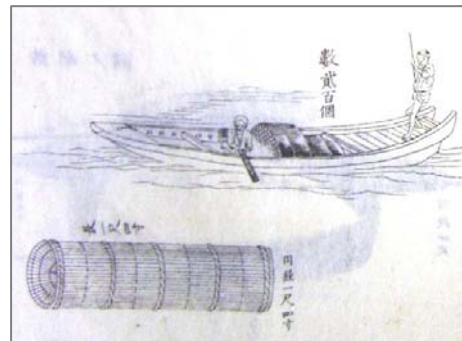
数年前、市内東崎町で霞ヶ浦の漁具をみせていただく機会がありました。自宅でお話をうかがったあと、庭のすみにある倉庫へ案内していただきました。そのとき目にした光景と驚きを、今でもはっきりと覚えています。そこにはたくさんの数の「エビダル」とよばれる漁具が積まれていたのです。住宅街の真中で目にした大量の漁具に、霞ヶ浦とともにあったマチの人々の営みを実感することができました。

「エビダル」はエビを主な対象とした筒状の漁具で、カエシとよばれる漏斗状の部分が2~3個ほど内部に取りつけられています。えさをつめた藁製の「ツツコ」を入れて、エビをおびき寄せます。カエシをくぐってタルのなかに入ったエビは戻ることができず、奥へ奥へと進むことになり捕獲される仕組みです。

かつて東崎町でエビダル漁をした人々は、エビダル自体の製作も行っていました。つまり職人でもあったのです。こちらのお宅でも、ご主人が漁の傍らエビダルを製作していたそうです。タルは細く割った真竹をシュロ縄で結びながら製作します。積みあげられたエビダルには、製作途中のものも多く含まれていたため、その未完成のエビダルを寄贈していただくお願いをしました。マチのなかの営みを、博物館資料として残しておきたいと思ったからです。

朝早くからのご主人の漁を手伝う一方で、働き者だった奥さんは田植えの手伝いにもでかけたそうです。かつてマチ場の周辺には多くの水田がみられました。しかも、腰までつかれるほどの深田で、水田のなかには竹が渡してあったそうです。また、以前の土浦には養蚕や製糸業にかかわる施設が数多くありましたが、繭を乾燥させる仕事の手伝いにもでかけ、蚕の蛹を分けてもらってエビダル漁のえさに使ったこともあったそうです。水辺のマチで展開した多様な生業の一端をうかがうことができました。

常陸国南部の商業の中心として発展してきた城下町土浦。霞ヶ浦の水運がその商業を支える役割を担ったことはもちろんですが、マチの人々の生活にとっても霞ヶ浦は大きな存在でした。江戸時代の町人学者色川三中の日記「家事志」には、周囲の水田で行われている農耕の様子や、城下にだされた霞ヶ浦での漁に関する触書などが書き留められています。城下町という商人が住むイメージが先行しますが、そこには商業だけにとどまらない多様な営みがあったことを「家事志」は教えてくれます。現代の市街地で目にした「エビダル」の光景も、水辺に成立したマチの営みを伝えてくれるひとコマといえます。(萩谷良太)



(左) エビダル、(右) 『湖川沼漁略図 并 収穫調書』(明治13年)より「蝦夷漁」

「エビダル漁」の様子は、2階展示ホール「情報ライブラリー」の映像「霞ヶ浦の伝統漁業(春)」でご覧いただけます。

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を7/5(土)午後2時から開催いたします。



市史編さんだより

～～～ 続・江戸期のシニアライフ ～～～

すてきなおじいさん、^{ながしまやすのぶ}長島尉信

前回の「霞」で、江戸期のシニアライフとして、色川家の使用人山本勝右衛門の生き方をご紹介しましたが、今回はそれとは又ひと味違ったシニアライフを見ていただこうと思います。

皆さんは^{ながしまやすのぶ}長島尉信という人をご存じでしょうか。名前ぐらいい聞いたことがある、という方もいらっしゃるでしょう。今日は150年前の土浦を訪れて長島尉信に会ってみようではありませんか。

安政2(1855)年10月のある日、^{じかたび きやはん}地下足袋・脚絆姿で尉信が^{そとにし}外西町(現在の文京町)の家を出て来ました。どこへ何をしに行くのでしょうか。私たちも行ってみましょう。着いた所は^{とうぎま たんぼ}東崎の田圃です。そのころの東崎は今と違って、霞ヶ浦に面して田圃が広がっていました。尉信はそこで^{じづめ}地詰、今でいう測量をしているのです。そして田の面積や、境界をきちんと定める仕事をしています。そのために土浦藩に^{め しか}召し抱えられて藩士になりました。天保13(1842)年、62歳の時です。今なら定年退職する年ですね。

ではそれまでの尉信は何をしていたのでしょうか。田圃に別れを告げて、尉信の経歴を見てみましょう。

尉信は天明元(1781)年小田村(現在つくば市)の小泉家に^{よしのり}仙右衛門吉則の長男として生まれました。しかし、お姉さんが^{むこ}婿を取って家を継いだため、尉信は同じ小田村の^{なぬし}名主である長島家の養子となり、文化5(1808)年28歳で名主職を継ぎました。名主には農民の生活基盤を守り、生活を維持する責任がありました。そのため特に土地の問題や^{ねんぐ ちゆうしゆう}年貢の徴収による紛争が起きれば、領主と村人の間に立って苦勞することも多かったのです。これらの経験から尉信は土地の制度や^{そぜい}租税の法などに深い関心を持ったようで、のちに多くの農政に関する著作を出しています。

文政8(1825)年45歳で名主職を息子に譲った尉信は、江戸に出て天文・暦学・和算・測量などの勉強をしました。そして帰郷してから租税法の改革について研究し、書物を著したのがきっかけで、はじめは水戸藩に招かれ、その後土浦藩に召し抱えられるようになったのです。それについては、多分皆さんもよくご存じの土浦藩の公用人大久保^{かなめ}要の骨折りによる所が大きかったのですが、大久保要はよほど尉信に惚れ込んでいたようです。自分の息子を教育して欲しい、と頼んだり、江戸の有名な学者に尉信の著書を見せたら感心して他の人に又貸した、といったような手紙を書いたりしています。

このような話を聞くと、さぞかし気むずかしい恐いおじいさんのように思われますよね。でも決してそうではありません。尉信には子供もたくさんいましたし、奥さんとも仲むつまじかったようで、土浦へも呼び寄せて一緒に住んでいました。奥さんの病気を^{きづか}気遣う手紙も^{のこ}遺っています。又田宿町(現大手町)で薬屋を営んでいた色川三中・^{みなか みとし}美年兄弟とも親しく付き合っていました。そのうち弟美年に^あ宛てた手紙では、美年の子供の成長や病気を^{たず}尋ねる文言が頻繁に見られ、尉信のやさしい心遣いがよく分かります。又薬のことについても詳しくあったようで、神龍寺や東光寺のお坊さんに薬の処方教えてあげて感謝されたりしています。気さくで心根の優しい尉信の人柄が伝わってくるような文章です。

若い頃、伊勢参りに行った折りに大和・奈良を見学し、中山道を通して史跡や名所を探りたいと志した時から、慶応3(1867)年87歳で死去するまで、^{おうせい こうがくしん}旺盛な向学心を持ち続け、その一方で家庭や友人も大切に^{てんじゆ}して天寿を全うした長島尉信の生涯は、今の人々の模範とも言える、江戸期のもうひとつのシニアライフではないでしょうか。

菅井和子(市史編さん係臨時職員)

市史編さん係では6・7ページの本文中に登場した色川三中(薬種業・醤油醸造業を営んだ江戸時代後期の国学者)の日記を翻刻しています。今春「土浦市史資料「家事志」色川三中日記」第3巻を刊行しました(受付で頒布中)。



霞 短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。今号は亀城公園にある博物館付属展示館東櫓を大塚博さんにご紹介いただきます。大塚さんは土浦市文化財保護審議委員・博物館協議会会長をお勤めのかたわら、東櫓受付業務もご担当いただいています。

亀城公園東櫓について

昭和61年に土浦城址整備委員会が組織され史跡整備・建物復元の検討が行われ、東西櫓の復元が要望されました。費用の一部は市民有志による「お城づくりをすすめる会」が中心となって募金しました。市は平成3年に西櫓を、同10年東櫓を復元し、ここに明治17年に焼失してより114年振りに東西櫓が並び建ったのです。復元に当たって西櫓は本来の如く倉庫とし、東櫓は市民の声もあって資料を展示して見学できる施設としました。



東櫓の規模は1階が梁間4間・桁行5間、2階が梁間3間・桁行4間の木造2階建入母屋造で、外観は当時のものと全く同じですが、内部構造は倉庫ではなく展示用としたため変わっており、また2階への階段もゆるやかなものとなっております。木材は主に松と杉ですが、梁は松で岩手県三陸地方の2百数十年を経たもの、柱は和歌山県産で太さ1尺角、壁板は岡山県産で無節、何れも立派な木材です。外観は白壁の殿堂、内部は豪壮な木造建築、訪れた方々は梁組の見事に驚かれます。展示物としては、1階に土浦城の歴史・土塁の断面、本丸跡からの出土遺物・巨松の年輪・西櫓の鯨などがあり、2階には全国の大名家配置図・土浦の古写真などが展示されています。



本年は10年目に当たります。入館者はこれまで約7万5千人（4月末日現在・1日平均26.4人）ありましたが、1人でも多くの方々に観ていただきたいと願っているところでございます。

大塚博（東櫓受付）

コラム（4） — 墨の色 —

「墨は何色？」と問われたら、「黒！」と答えるのが普通です。博物館では昨年7月のリニューアルオープンに際し、いくつかの古文書や絵画の複製を作りました。本物と同じ色調を出すにあたって難しかったのは、朱でも青でもなく、墨の色でした。墨は濃い薄いだけでなく、青みや赤み、清濁など作品によって色合いも雰囲気も異なります。和紙や絹との相性で見せるにじみやかすれ、時代を経た古色も作用して表情もさまざまです。複製は、専門家と相談して実際の墨に黒や赤の顔料を加えたり、時にはこすって、てかりを出したりして仕上げました。「墨に五彩あり」というそうで、墨色とは単純なように見えながら、実は奥が深いことを実感しました。

歴史資料としての古文書を読んだり、書画の流麗な筆遣いを鑑賞するだけでなく、時には古の人々の墨へのこだわりを思いを馳せ、墨の色に注目してみるのも一興かもしれません。苦心して作った複製は展示室に並んでいます（3ページで紹介した「関東幕注文」もそのひとつです）。是非、ご覧ください。（木塚久仁子）

情報ライブラリー更新状況

【2008・7・1現在の登録数】

古写真 383点（+22）

絵葉書 246点（+38）

※（ ）内は2008年4月1日時点との比較です。

※展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページで紹介した絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2008年度

夏季展示室だより（通巻第4号）

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

次回展示（2008年度秋季）は2008年10月1日（水）からご覧いただけます。「霞」2008年度秋季展示室だより（通巻第5号）は10月1日発行予定です。次回のご来館もおまちいたしております。